「最悪」の後にやってくるのは必ず「最良」。だから「痛い思い」をすると闘志が湧く

清水国明氏

タレント・自然楽校代表取締役社長

KUNIAKI SHIMIZU

1950年福井県生まれ。京都産業大学在学中の73年「あのねのね」としてデビュー。76年同大学を卒業。その後、バイクレースやアウトドアに活動の領域を広げる。2005年自然楽校を設立。山梨県の河口湖に、アウトドアパーク「森と湖の楽園」を開園。新入社員や経営者・役員向けに組織行動に基づいた企業研修も実施（http://www.workshopresort.com/school/）。家族で富士山の麓に住みスローライフを実践中。

CAREER CRUISING

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探すため、
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

Interview = 大久保幸夫、入倉由理子
Text = 入倉由理子（54～56P）
大久保幸夫（57P）
Photo = 鈴木慶子

山梨県大月市を起点に走る富士急行線の終着駅、河口湖駅を降りて、車で10分ほど走った山の中腹に、清水国明氏がオーナーを務める「自然学校・森と湖の楽園」がある。自然とのふれあいを通じ、都市生活で忘れてしまった人間本来の機能を目覚めさせ、心と体の健康を取り戻す。このテーマを実践しているのが同園である。子どもキャンプや自然体験イベントの開催のほか、ツリーハウス作りや農業体験など団塊世代向け研修や企業研修ビジネスにも力を注ぐ。かつて「あのねのね」として音楽の世界で大活躍し、その後バイクレースに挑戦、そしてアウトドア活動とそのビジネス化……。次々とフィールドを変え、新領域を開拓し続ける清水氏の足跡を辿った。

大学時代はひたすらアルバイト
「適職」を探し続け、デビュー

「生まれ育ったのはド田舎でした。友だち兼師匠は愛犬のサブ。彼に連れられて野山や谷を駆け巡り、ウサギやクマ狩りに明け暮れた毎日でした」

福井県・九頭竜川の源流にある小さな村の小学校は、１人の教師が３学年を一緒に教えるほど小規模。クラスメイトとは、家族ぐるみの温かく深い付き合いだった。

「僕の場合は大学から都会にフェイド・インしていくわけだけど、この田舎生活が原点にあるから、都会だけの暮らしは落ち着かない。だから今も仕事で都会に出ても、帰ってくるのはここ、河口湖なんですね」

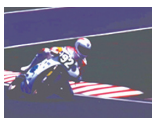
大学に入学後は、アルバイトに明け暮れた。ずっと剣道をやっていたので、警察官になろうと思っていたところを、「口が立つから車の営業をやったらどうか」と周囲に勧められた。

「いろんな職業があるんだな、と思いました。だったらお金も稼げるし、あらゆる可能性を試すためにアルバイトをしようと。ある意味、就活ですね（笑）」

トンネル工事や長距離ダンプのドライバー、バーテン、教材の営業のほか、インドネシアまで貨物船での往復や、自ら英語塾を起業したこともあった。あまりの忙しさにアパートに帰れず、駅で仮眠を取って次のアルバイトに向かう。そんな生活だったという。

そんな生活の中で「適職」は見つかったのかと問いかけると、「何でもできると思った」と言い、さらに「今からでも、なんでもいける」と付け加えた。

清水国明氏　キャリアヒストリー

1950年	0歳	福井県大野郡和泉村（現大野市）に生まれる 幼少期は野山を駆け巡り、自然とともに暮らす
1969年	19歳	京都産業大学法学部入学。さまざまなアルバイトを経験し、適性のある仕事を探す
1973年	23歳	在学中に原田伸郎氏とのフォークソング・デュオ「あのねのね」として、『赤とんぼの唄』でデビュー。大ヒットを記録 デビュー曲となった『赤とんぼの唄』
1976年	26歳	京都産業大学卒業。その後も芸能活動を続ける
1980年	30歳	ラジオ番組の1枚のハガキをきっかけに、鈴鹿8時間耐久ロードレース（8耐）への出場を宣言。二輪免許を取得
1984年	34歳	8耐の登竜門的レースである鈴鹿4時間耐久レースに出場、完走
1989年	39歳	国際A級ライセンスを取得
1990年	40歳	元世界GPライダーの福田照男氏とペアを組み、8耐に初参戦。予選で鎖骨を骨折するが、完走。これをもって、レース界から引退  8耐。骨折をしながらも完走した
1991年～		家族でキャンピングカーに暮らし全国3万6000キロを走破、カナダを縦断 その後、90年代からはアウトドア活動に力を注ぐ。自ら木を伐採し、ログハウスを建てるほか、厳冬のアラスカでの雪上キャンプ、灼熱のミクロネシアでの無人島キャンプ、テキサス幌馬車ツアーなど、大自然の旅、生活を経験 世界中で「アウトドアライフ」を満喫
2003年	53歳	河口湖に拠点を移す 河口湖に移住したばかりの頃のログハウス作り
2005年	55歳	自然楽校設立、代表取締役社長に就任。アウトドアパーク「森と湖の楽園」を開園

同じ頃、原田伸郎氏と旅館のアルバイトで知り合い、初期メンバーである笑福亭鶴瓶氏、その妻とともに４人で「あのねのね」を結成した。そして、当時の超人気番組『ヤングおー！おー！』に出演した。それがうけてデビューにつながり、一躍、人気スターとなったのである。「かつて仮眠を取っていた駅を、マネージャーに連れられて、ファンに追いかけられながら走り抜ける。ちょっと前まで時給数百円で働いていた自分のポケットには100万円。人生、何があるかわからないと思いました」

「やりきった」と思うと
次にやりたいことが天から降ってくる

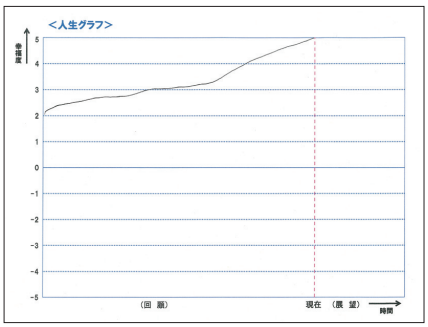
その後、音楽活動のほか、司会、レポーターやラジオのパーソナリティーなど、順調にタレント活動を続けていた。ところが1980年に、ラジオ番組のハガキをきっかけに、鈴鹿８時間耐久ロードレース（８耐）への出場を宣言する。このときまだ、二輪免許も持っていなかったにもかかわらず、だ。

「僕の場合、そのとき向き合っていることには、とにかく一生懸命になります。でもそれを『やりきった』と思うと、必ず次にやりたいことが天から降ってくるんですね。なんとなくこんな方向、とイメージを持っていると、それに必要な情報や出会いがバカバカとやってくる。そうするともう、やらないと気が済まないんです」

８耐の登竜門とも言われる４耐への出場を経て、90年、ついに８耐を完走。これをもって、レースから引退。次は、アウトドア活動に興味が移り、90年代は世界のあちこちでキャンプ生活を体験した。

2003年に河口湖に拠点を移したのも、「天から降ってきた」ようなものだ。釣りで河口湖を訪れたとき、「自然の中で暮らしたいんだけど、どこかいい土地ないかなあ」と、釣り友だちに話したところ、現在暮らす土地に連れてこられた。そして、その場で購入を決め、05年の「自然楽校・森と湖の楽園」の開園につながっていく。

生まれてからずっと、上昇を続けるライフライン。「1日1日の上下の振れ幅は大きいけれど、年ごとにならしてしまえば上がりっぱなしですね」（清水氏）



これが自分に与えられたベストな状況
そう思えるから踏ん張れる

この間、すべてが順調というわけでは決してなかった。バイクに明け暮れた80年代は14回もの骨折に苦しめられた。河口湖に移住を決めたとき、妻から離婚を言い渡され、新生活は単身でのスタートとなった。また、「森と湖の楽園」開園後、一時経営状態が悪化し、40人いたスタッフが次々と辞めていくという事態も経験した。

「痛い思いが大好きなんですね（笑）。ひどいこと、最低なことに出会って、苦しかったり、責められたりするでしょ？　そうすると嬉しくて闘志が湧くんですよ」

「最悪」の後に、必ず「最良」がやってくるという信念が礎にある。ケガの後には、８耐の完走が待っていた。単身での寂しい生活を経て、新しい家族、多くのスタッフや来園者に囲まれる賑やかな生活がやってきた。そして、多くのスタッフが去っても４人の腹心は残り、事業の再構築によって結果的に経営状態は改善した。

「諦めたら終わりでしょ。どんな状況でも、これが今の自分に与えられたベストな状況。そう思えるから踏ん張れるし、いい結果を招くことができるんだと思います」

河口湖の森に抱かれると、幼い頃にかわいがってくれた祖父の膝の上で感じた「守られている」という感覚が蘇る。それは自分が祖先や自然の万物とつながっている「安心感」だという。清水氏はこの自然を楽しむこと、そして、楽しんでもらうことを現在ライフワークと考えるが、それでも、「いつかまた別のやりたいことが出てくるかもね」と笑う。

「『人生、いくつ生きられるか』がテーマ。だから２時間しか寝なくても、楽しくてしょうがない。これを僕は『忙楽（いそたの）しい』と呼んでいます。常に100％で生きて、死ぬときはバッタリ……そんな『直角死』が理想なんです」

■ 清水国明氏のキャリアをこう見る

ポジティブ・シンキングで何でも「楽しむ」、対自己能力の達人

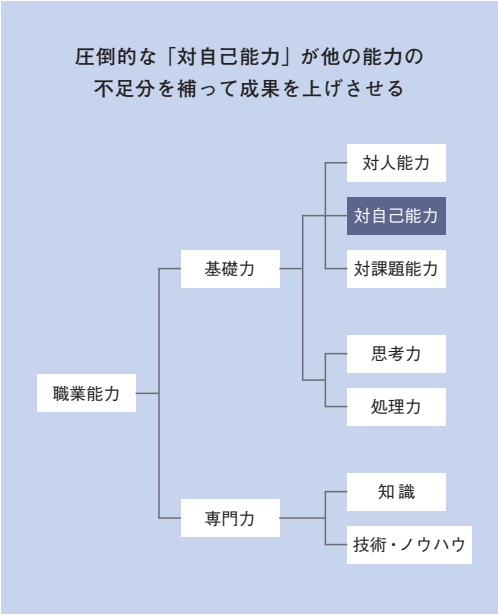
大久保幸夫
ワークス研究所　所長

インタビュー前に必ず“ライフライン”という1本の線を描いてもらうことにしている。生まれてから現在に至るまでの人生満足度のアップダウンを示すものである。清水氏はほとんどノータイムで右上がりの一直線を書いてくれた(左ページの図参照)。「落ち込むことはなかったんですか？」と尋ねると「あったと思うんですけど忘れちゃうんです。細かく見ればでこぼこあるでしょうけど、基本的に今が最高と思っているほうなんで……」と笑う。

楽天的。前向き。なぜこのような性格が出来上がったのだろうか？

ひとつは幼児期のおじいちゃんとの関係だろう。膝の中に抱かれ「おまえが外でどんなことをしてこようと、たとえそれが悪いことであろうと、おじいちゃんはおまえの味方だからな」と言われ続けてきた。それゆえか「ぼくのことを祖先がみんなで見ていてくれて、どうやって国明を幸せにしてやろうかっていつも会議してるんですよ」とまじめに語りだす。

そしてもうひとつは、努力によって結果オーライにしてきたという体験だろう。8耐で、本番前日に骨折をして地獄を見ながら、翌日の本番に無理やり出場し、1秒未満のぎりぎりのところで完走を果たし天国を見たというような経験である。「人生はブランコみたいなもんで。最悪の後には最良がくるようにできてるんですよ。諦めなければね！」という人生哲学に行き着いているのだ。

彼は特定の専門性で勝負するというタイプではないし、道を極めるというタイプでもない。懸命に努力してできるようになると、次のことに心が動いてゆくタイプで、スパイラル的に可能性を広げてゆくキャリアのパターンを実践している。そして「楽しむ」ということが常に重視され、楽しくやるから結果がでるのだと確信している。

私は彼を「対自己能力の達人」だと思う。基礎力のひとつである自分自身の気持ちや行動をコントロールする力のことである。ストレスをためず、頑張ればなんとかなると思い、実際にできるまでやり続けることができるのだ。